

# 補聴器でリスク低下



①補聴器の調整のため真生会富山病院を訪れた男性患者（左）

②性能が充実し、色やデザインが多様化する補聴器



## 難聴と認知症

下

近年の研究で、補聴器が認知症の対策に有効であることが分かってきた。中国・山東大などの国際研究チームの分析によると、難聴の症状があるのに補聴器を使っていな

なっている人が

進まない着用

## デザインや性能アップ

6月下旬、高岡市の男性(66)は補聴器の調整のため、真生会富山病院(射水市)を訪れた。家族の勧めで今春に着け始めたという。耳鼻咽喉科専門医の真鍋恭弘院長に「会話が楽しくなってきました」と話した。

日常生活の中で、水の流れる音がうるさく聞こえるなど若干の違和感があることも伝えた。真鍋院長は、補聴器に耳や脳が慣れるには3カ月程度かかると説明した上で「焦らず続けることが大切です。よ」と語ると、男性はうなずいた。同病院では、耳鼻咽喉科を受診する患者の約3割が難聴の症状を訴える。新型コロナ対策のマスク着用やアクリル板設置によって声が聞き取りづらいつと感じる人が増え、受診者数は以前に比べて多く

った人は、耳が健康な人に比べて認知症を発症するリスクが1.42倍と高かった。一方、補聴器を使っていた人のリスクは、健康な人とはほぼ同等の1.04倍にまで減った。

円台と高価な点も、着用が進まない要因となっている。中高年齢者への補聴器の購入費を助成する自治体が全国的に増えているが、北日本新聞の調べによると県内では小矢部と滑川の2市のみとなっている。

おしゃれ感覚

で難聴を自覚している人のうち補聴器を所有しているのは15%。デンマークの55%、イギリスの53%、フランスの46%に比べると著しく低い。真鍋院長は「『格好悪い』『年老いた気がする』といったイメージから敬遠する人が多い」とみる。

補聴器は片耳だけで5万〜60万

近年の補聴器の進化は目覚ましい。理研産業補聴器センター高岡店の松田晃店長は「今までのイメージを変えるデザインや高性能の補聴器が多くなってきた」と言う。快適に使えるように軽量・小型化した機種に加え、ファッション性の観点から色の選択肢が増え、おしゃれ感覚で使えるようになってきた。最近では雑音を自動で抑えるAI(人工知能)搭載型や、転倒時に家族に異変を伝える機能を搭載したものも登場している。

同店によると、耳にかける従来タイプを購入する人が半数以上を占める一方で、コロナ禍以降ではマスクを着用しても邪魔にならないよう耳の中に入れるタイプを買い求める人が増えているという。

販売店によっては購入前に補聴器を無料で貸し出すところもある。松田店長は「難聴と認知症の関係は最近よく言われるようになった。補聴器への関心は高まりつつある。『聞こえ』に対する理解がさらに深まれば、認知症対策も一層進むのではないかと話した。

(田中智大)

「上」は5日に掲載しました